令和３年５月 24 日
庁議資料

令和２年度　狛江市立学校第三者評価委員会　報告書　概要版

１　狛江市立学校第三者評価委員会委員

【委員】

委員長	帝京大学大学院　教授	坂本　和良
委　員	一般財団法人　教育調査研究所　研究部長	大橋　　明
委　員	学校法人清和学園　子鹿幼稚園　園長	豊島　秀臣
委　員	横浜 DeNA ベイスターズ　元監督	中畑　　清

【事務局】

狛江市教育委員会教育部理事兼指導室長	小嶺　大進
狛江市教育委員会教育部指導室統括指導主事	坂本　尚毅

２　第三者評価実施概要

平成 24 年度までは全小中学校を毎年評価対象校としていたが、平成 25 年度から全校を中学校区によって２グループに分け、５校ずつを隔年で評価することにより、短期的な評価に加え、２年間のスパンで中期的な評価を実施することとした。

評価を焦点化するために、「学力向上の視点」「特色ある教育活動の視点」からそれぞれ評価の観点を学校ごとに決定し、その観点にそって重点的に評価を進めた。

これまで評価委員による学校訪問を年２回実施し、１回目に評価の観点における各校の課題の確認、２回目にその課題に対する取組状況や改善内容を確認することで、より学校の実態に沿った評価を推進した。

令和２年度は新型コロナウイルス感染拡大防止を踏まえ、直接の学校訪問ではなく、第１回目は各学校の様子と学校経営方針が分かる動画を各学校で作成した。この動画データとともに、学校経営に関する資料を委員に送付し、評価票の作成を依頼した。

第２回目は、訪問者を少人数にし、訪問時間も短縮した上での学校訪問を予定していたが、緊急事態宣言が再び発令されたことを踏まえ、学校訪問の実施を見送った。学校の教育活動は継続しているため、学校経営方針の具現化が分かりやすい授業を撮影して委員に第１回目と同様、評価を依頼した。

３　令和２年度評価対象校及び評価の観点

学校名	評価の観点
狛江第三小学校	令和２年度は、コロナ禍のため、学校ごとに評価の観点を設定せず、５校統一の観点を以下の通り設定し、評価に当たった。 【評価の観点１】 多様な子供を誰一人として取り残すことのない学びの保障 【評価の観点２】 評価の観点１を達成するための組織づくりと人材育成 【評価の観点３】 コロナ禍における教育活動の工夫
狛江第六小学校	
和泉小学校	
狛江第二中学校	
狛江第三中学校	

４　狛江市立学校第三者評価委員会の経過

⑴　事務局による校長等へのヒアリング及び評価の観点の説明
令和２年 11 月　会場：各学校

⑵　学校説明、学校経営方針説明のための動画作成及び委員による視聴
令和２年 11 月 16 日（月）～令和２年 12 月４日（金）

⑶　学校経営方針の具現化を目指す授業の動画作成及び委員による視聴
令和３年１月 20 日（水）～令和３年２月 26 日（金）

⑷　まとめ
令和３年３月

５　総括

⑴　学校評価を生かした学校経営

○総括

カリキュラム・マネジメントの視点から、地域・保護者にとって分かりやすく、つながりやすい学校作りとして、教育目標を見直し、身に付けさせたい力が具体化されていることは有効な手だてとなる。さらに、学校が中心となって地域や関係機関をつなげる取組も進めていただきたい。

⑵　評価の観点①

○総括

「多様な子供を誰一人として取り残すことのない」ようにするためには個別最適な学びが求められるが、そのためには児童・生徒の学びを的確に見取ることができる教師の力量が求められる。ICT の活用によって児童・生徒の学習状況が把握できると言われているが、最終的に判断するのは教師である。このための力を教師が身に付けていくことが大切である。

⑶ 評価の観点②

○総括

OJT が成果を上げるためには、当該教師がどの程度課題意識を持っているのか、そして、OJT や授業観察後の指導、研究会の内容が、その課題意識と整合しているかが焦点となると考える。全教職員で若手教員を育成することは当然だが、若手教員の割合が高くなりベテラン教員が少なくなっている状況では、若手教員自身が自ら学ぶ意識を高めてもらいたい。

⑷ 評価の観点③

○総括

「コロナ禍によりできないことを考えるのではなく、「何ができるか」を常に考える事を大切にしている」という校長の言葉は非常に心強く、このコロナ禍の学校経営で大切にすべきことを示していると感じた。

⑸ 教育委員会の支援

ア　総括

今年度は、小学校においては新学習指導要領の全面実施の１年目に当たるが、新型コロナウイルスの感染拡大防止による一斉臨時休業や新しい生活様式により、当初の教育課程の通りには実施できない。

校長の学校経営の説明の内容が言葉だけでなく、実際に実行できるように指導主事等が学校を訪問して助言をしてもらえればと思う。

イ　補足意見

ICT 機器については、個人情報の管理等避けられない規制が必要だが、できるだけ制約は少なくし、学校の教員がやりやすい環境を整えてもらいたい。

６　各学校における主な評価

【狛江第三小学校】	◆ 三小ミニマムでカリキュラム･マネジメントによる授業時数の確保策が説明されているが､年度当初の休校期間の補完のためだけでなく､通常の教育活動の見直しにもなっている重要な対策であり､全校あげて取り組んでいる姿勢に感謝したい。 ◆ 資料の中に｢優れた専門性を有する教員が主体となり､『主体的・対話的で、深い学び』の実現を目指した校内研究の充実｣と記されているが、このことが少しずつ形になっているのではないかと推測される。
【狛江第六小学校】	◆ 相互授業参観、放課後の自主研修、先輩教員による OJT と人材育成の機会を確保し、若手教員の育成を組織的に行っていることが分かった。全教職員で若手教員を育成することは当然だが、若手教員の割合が高くなりベテラン教員が少なくなっている状況では、若手教員自身が自ら学ぶ意識を高めてもらいたい。 ◆ カリキュラム・マネジメントの視点から考えると、育成を目指す資質・能力を明確にした「単元・題材の配列表」などのカリキュラムを示したものが必要になる。まだ、作成されていないのであれば、次年度に作成すべきである。
【和泉小学校】	◆ 学年経営案は、学年主任が作成したらそのままにされてしまうことが多く、実際には学年経営に生かされないことがままある。担当学年の教師全員が学年経営マップの作成に関わることによって、学年の目標等が視覚的に捉えられ、また教師間に学年として児童を育成しようとする気持ちを醸成することができる。 ◆児童がタブレットを使いこなしている事に感心した。特に、データを共有したり、互いに転送し合ったりすることに精通している点が驚きである。児童が自分たちで撮った動画を使って説明しているので説得力がある。児童自身が課題意識をもって取り組んだのであれば、申し分ない。
【狛江第二中学校】	◆ 学校は、考え方、学び方、生き方を学ぶ場であるという理念は分かりやすい。教育活動すべてにおいて、生徒が主体的に取り組むことを目指していることは、学習指導要領改訂の趣旨を先取りしているといえよう。すべての生徒の進路希望を実現することを目指す学校像の一つに加えているのも中学校の特色であろう。 ◆ これまでの研究成果を生かし、課題設定、課題解決、共働解決、まとめと振り返りの４つの視点から構成される学びのスパイラルを各教科で実践していることが理解できた。
【狛江第三中学校】	◆ 校長による学校経営計画の指針への熱意が伝わってきた。中でも、『心・考感協』への理念には共感した。朝のあいさつ運動、朝の読書会は習慣化された取組だからこそ、生徒にも抵抗なく受け入れられている経緯が伺える。銀杏募金は、災害地への募金活動として価値ある活動から、代々継承されてきていたもので、それに関わる生徒たちへの生きた教育であり素晴らしいと感じた。 ◆ hyper-QU を活用した集団づくりに課題があり、後継者の育成が急務であるとのこと。現在具体的にどのような取組を行っているのか示してもらえるとよい。